生徒が主体的に発信し、相互理解を深める能力の育成

—その１—

筑波大学附属駒場中・高等学校　英語科
多尾奈央子・秋元　佐恵・阪田　卓洋
須田　智之・髙橋　深美・八宮　孝夫
山田　忠弘

生徒が主体的に発信し、相互理解を深める能力の育成

—その１—

筑波大学附属駒場中・高等学校　英語科
多尾奈央子・秋元　佐恵・阪田　卓洋
須田　智之・髙橋　深美・八宮　孝夫
山田　忠弘

要約

今年度は本校 SSH 研究指定校第 4 期の初年度である。研究開発課題は「国際社会に貢献する科学者・技術者の育成をめざした探求型学習システムの構築と教材開発」となっており、その研究の柱の一つが「国際社会に貢献する科学者・技術者の育成をめざした探求型学習の教材開発と実践」である。

SSH 第 3 期以来、本校生徒による日本国内外における研修や、英語での研究発表の機会が増えている。今年度も、台中高級第一中学研究交流（台湾）、釜山国際高校訪問（韓国）、他校 SSH プログラムによる海外派遣（アメリカ・台湾（高雄））等のプログラムが実施されている。

このため英語科では、海外の文化を広く受け入れ、国際社会に向かって発信する能力の育成を目指す教育活動を継続するとともに、普段の授業を通じて生徒が主体的に学ぶ学習環境作りを探求している。

この一環として、英語科では外部講師によるワークショップ、講演会を実施するとともに、イングリッシュルームを活用して、生徒の発信力の向上に努めている。

1.　はじめに

1.1　英語科の授業構成

本校英語科では、中高 6 ヵ年一貫教育の指導課程として、生徒の発達段階に応じ、6 年間を基礎期［中 1・中 2］・実践期［中 3、高 1］・発展期［高 2・高 3］という 3 段階に分けて位置づけ、それぞれの特徴に応じた指導を行っている。

各学年の授業は以下のとおりである：

中学　「英語」4 時間（LL・TT 各 1 時間を含む）
高１　「コミュニケーション英語 I」3 時間＋
　　「英語表現 I」2 時間　（TT1＋LL1）
高２　「コミュニケーション英語 II」4 時間
　　（TT　1 時間を含む）
高３　「コミュニケーション英語 III」3 時間（選択）
　　「英語表現 II」2 時間（選択）

本校英語科ではどの学年、科目においても「英語は英語で教える」ことやコミュニケーション活動を重視した教育を共通理解として指導にあたっている。

1.2　英語科の取り組みの指標

本校の学校教育目標は　「『自由闊達の校風のもと、挑戦し、創造し、貢献する生き方をめざす』の理念にもとづき、生徒自らが学ぶ態度の涵養に努め、将来を担う社会のトップリーダーとして活躍できる能力と意欲を身に付けさせる」ことである。また、SSH 研究開発課題として「国際社会に貢献する科学者・技術者の育成」が標榜されている。そのため、英語科では発信力・プレゼンテーション能力の涵養を念頭においた教育活動を行っている。

本論では、今年度の英語科の取り組み、および国際交流の実践について述べることとする。

2.　各学年における取り組み

2.1　中学 1 年生（70 期）　担当：阪田卓洋

2.1.1　はじめに（基礎期のスタート）

中学 1 年生の英語授業と言えば「入門期」とよく言われるが，小学校における外国語活動が充実しつつある現在では，いささか状況が変わってきているかもし

れない。実際に生徒の様子を見てみると，外国語を学ぶことが初めてという緊張した面持ちの生徒がいる一方で，最初の授業からスラスラと英語の自己紹介をやってのける者もいる。全くの入門者と経験者が混在するクラスにおいてどこに焦点を絞るかが難しい部分もあったが，授業を始めてしばらくすると，彼らのライティング能力が低いことに気付いた。授業をしていると，中 1 程度の文法を使った簡単な英文であれば，彼らは耳で理解していることがわかる（Can you~? Do you like~? How many ~? など）。しかし，ひとたび書かせるとボロボロの英語が出てきた。これを踏まえて，筆者は「耳から入った情報を最終的に書けるところまで持っていく」ことを日々の授業で意識した。

無論，書くことを意識するあまり音声面の訓練が疎かになることは避けたい。聞くことから入り，スピーキング・リーディング活動をふんだんに取り入れた上で，ライティングまでつなげられるような授業を目指した。それを端的に表現した目標を以下に載せる。

1. 教科書のどのレッスンも，その内容を英語で説明することができる。
2. 辞書を使わずに，簡単な英語のストーリーを理解することができる。
3. 英語で 1 分間スピーチをし，そのあとの質問に答えることができる。
4. 100 語でまとまりのある英文を書くことができる。
5. 読んだ英文，聞いた英文に対して，自分の考えを付け加えて発表することができる。

この 5 項目を学年の最初に提示し，生徒のモチベーションを高めた。とりわけ 3,4 に関しては生徒にとって衝撃的な数値であったらしく，プリントを配布するとどよめきが起こった。1 分間と 100 語という数値には科学的な根拠はないが，生徒にとってはこのような数値目標の方がわかりやすいし目標にしやすい。また，とかく正確さを求めがちな学校現場においては，ある程度の量を話させる，書かせるというのも大事な視点であると考える（この点については根岸(2017) p.74 と考える方向は一緒だと思われる）。筆者としては，高校 3 年生になったときには，6 分間くらいは滔々と英語で話せ，また 600 語程度のエッセイが書けるだけの英語力を身につけてほしい，という願いも込めている。

2.1.2　授業について

英語の週配当時間 4 時間は 3 つの要素から構成されるが、筆者の担当は「教科書を中心に英語の基本的な仕組みを学ぶ時間」2 時間と「ALT とともに実際に英語を使ってみる時間」の 1 時間である。最後の「LL 教室で聴解能力の訓練をする時間」1 時間に関しては担当の多尾教諭に詳述してもらう。ここでは筆者が担当している授業の概要を述べる。

2.1.2.1　授業の種類

先述したように筆者が担当する 3 時間のうち，2 時間は筆者単独の授業で 1 時間が ALT との TT である。この 2 つの授業を別々に進行させるという考え方もあるが，筆者は両者合わせて週 3 時間という計算で授業を進めた。ただでさえ学校行事により授業が潰れがちな本校においては，週 3 時間を柔軟に使うことが求められる。ALT との TT でも，ときには input 中心の授業になり，ときには output 中心の授業（これが TT の理想形だと思うが）になることがあった。これはやむを得ないと思うが，逆に週 3 時間の授業に一貫性が出て，生徒も受けやすかったのではないかと思う。以下に学期ごとの授業の概要を述べる。

2.1.3　1 学期

2.1.3.1　授業内容

教科書は *New Crown English Series 1*（三省堂）を使用しているが，1 学期は教科書の内容はあまり触れずに，生徒たちの身の回りのことを英語で言うトレーニングをした。教科書を開いても，その中で登場人物が架空の学校で自己紹介をしたり，好きなスポーツを紹介したり，友達を紹介したりしている場面が多く，this や that の導入では生徒たちにとってあまり関係のないものが扱われている場合が多い。よって，教科書の文法や語彙は踏襲しながらも，実際に生徒たちの生活に焦点を当てて英語を使うようにした。実施した活動を以下に載せる。

1. 自己紹介
2. What's this? What's that? (教室内の物を使って)
3. How are you? I'm fine. (様々な形容詞を使って)
4. サザエさん一家の紹介（He is ~. / She is ~.）
5. 他己紹介
6. 一日の生活（一般動詞，現在形の導入）
7. 友達の生活紹介（3 単現の導入）

1~5 まではひたすら be 動詞を用いた英文を扱った。2 では実際に教室の中にあるものを指さしながら質問し，生徒に答えさせたりしながら語彙を導入した。慣れてきたらウォーミングアップとして全員を立たせ，教室にあるもの，生徒の机にあるものを片っ端から質

問していき，答えられた生徒から座る，というゲームを行った。41 人全員に答えさせるのは大変だが，一人一人が参加できるゲームなので大変盛り上がった。

4 のサザエさん一家の紹介は家族の呼び名（mother, father など）を導入しながら，He is ~. / She is ~.を反復して使わせるのに格好の題材である。筆者は自信満々に授業に行ったが，なんとサザエさん自体を知らない，見たことがないという生徒がどのクラスにも一定数いた。brother-in-law を定着させる前に Masuo を定着さえねばならず，何とも言えない寂しさを覚えた。それでも多くの生徒がサザエさん一家の説明を英語でしてくれて楽しく活動できた。

1-5 までは文法説明を全くせずに進んでいたが，一般動詞に入る前に be 動詞を総括する時間が必要だと思い，ここで 1 時間使って，Murphy (2015)を用いながら be 動詞の復習をした。中 1 の段階では明示的な文法指導は馴染まないと思っていたが，数学的思考が優れている本校生徒にとっては，きちんとした文法理解に基づく正確な英語理解の方がよいのかもしれない。6,7 ではいよいよ一般動詞を導入した。be 動詞だけではどうしても言えることに限りがあるため，なるべく早い段階で一般動詞を導入したかった。ここでは小学生の時に導入されているであろう have, play, like などの基本動詞を用いてから，他の動詞も順次導入していった。基本動詞の選出には伊藤（1976）を参考にした。

1~7 まで終わったところで,「頭の整理」と銘打って文法を確認する時間を取った。be 動詞，一般動詞の平叙文，疑問文，否定文の作り方を明示的に指導した。上記以外にも Steven J. Molinsky & Bill Bliss (2001) や Sandra Heyer (1998)などを適宜参考にしながら独自の教材を使用して授業を組み立てた。

2.1.3.2　パフォーマンステスト

1 学期のパフォーマンステストは “My Favorite Person [Thing]” とした。50-60 語程度の英語で原稿を書いてきてもらい，30-40 秒程度でスピーチしてもらった。以下に例を挙げる。

This is my baseball bat. This is very light and popular. I use this every day. I use this for 3 months. This is easy to use. This is very very nice. This is my 7th baseball bat and this is the best baseball bat for me. I like this baseball bat and I love baseball. Baseball is fun. So, let’s play baseball! Thank you.

(65 語)　H.N.

彼は塾に通っておらず，授業での成果が見やすい。この中で教えていないものは to use の不定詞だけで，他の語彙や文法は全て授業でやったものである。それでも自分の言いたいことをちゃんと言えている点が良い。もちろんこれよりも英語としては質の高い原稿も多くあるが，こちらが教えたことだけでしっかりとした英文を組み立てているため高得点を与えた。

なお，聴衆の生徒達にも一人一人のスピーチを評価させた。観点は①声の大きさ，②姿勢・目線，③流暢さ，の 3 点にした。まずは形から評価してもらった。

2.1.4.　2 学期

2.1.4.1　授業内容

夏休みの課題として『NHK 基礎英語 I』 8 月号を課した。英語に触れさせ続けることが目的だったが，思わぬ副産物として『創作ストーリーコンテスト』というイベントを見つけた。基礎英語 I の 4~7 月号までの英語を使い，スキットを創作して応募する，当選したら実際にプロの声優が吹き込んでくれる，という面白そうなイベントだったので，全員に作らせることにした。夏休みの宿題としてスキットを考えさせ，夏休み明けの授業で発表させた。一人一人発表させることはできないので, グループで優秀作品を決めてもらい，その中で演者を決め，実際に演じてもらった。それなりに面白かったが，もともと 30 語以内という制約があったため，ストーリーも単調になりがちで，あまり成功しなかった。来年度はもっと語数が増えることを期待して再度やろうと思う。

なお，創作したストーリーを応募するかどうかは個人の判断に任せたが，応募した生徒の中から,『番組講師賞』1 人,『佳作』2 人が選ばれた（応募総数 1848 作品から『大賞』1 作品,『番組講師賞』1 作品,『パートナー賞』2 作品,『佳作』30 作品が選ばれる)。『番組講師賞』に選ばれた作品は 2018 年 1 月 3 日に放送される予定である。これは全生徒にとって良いモチベーションになるであろうし，来年度のさらなる奮起へつながると思われる。

2 学期の授業では，1 学期を踏まえて 2 つ授業スタイルを変えた。

① 5-minute teacher
授業冒頭の 5 分間，生徒に教師をやってもらう活動。1 学期は筆者が普通に挨拶していたが，生徒にやってもらった方が雰囲気もよくなるし，月日

や天候などのスペルチェックにもなるので，これを実施した。教師役は，あいさつをして，月日と天候を聞いて黒板にそれぞれ書いて終わりである。あまりにも簡単なので，過去形を導入してからは，昨日何したか，あるいは週末何したかを話してもらっている。そのあとに質疑応答の時間を取り，2,3 の質問に答えてもらっている。それなりに盛り上がるが，質問をさせたいがために，昨日何したかをわざとぼやかして伝える，という悪しき伝統が築かれつつあるのでどうにかせねばならないと考えている。

この活動は 3 年生まで続け，毎回誰かしらスピーチをする場面を作り続けたいと思う。

② 冒頭 dictation

最初に述べたように，ライティング能力を伸ばすことが今年の目標の一つである。そこで毎回の授業で dictation を課すようにした。読み上げる英文は前時に扱ったものが中心である。毎回の授業で 2 文ずつ扱えば 1 年を通して 150 近くの英文を扱うことができ，復習としては有益である。dictation で扱った英文は期末テストの範囲にも含め，そのときには「日本語から英語にできるように」と伝えている。

以上二つが 2 学期より新たに始めた帯活動である。これ以外にも前時の復習として生徒に発表活動をさせるという時間がある。そのため，帯活動だけで 20 分近く時間が取られるときもある。が，習った分だけ復習することが英語学習では大事であるため，これからも毎時間少しずついろいろな活動を取り入れ，帯活動として復習をしていく予定である。

では，以下に 2 学期の授業内容をまとめる。

1. 夏休みにしたこと（一般動詞の過去形，be 動詞の過去形）
2. 会話を続けよう（過去形の疑問文）
3. 写真を使って体育祭を紹介する（現在進行形）
4. Mr. Bean 視聴（過去進行形）
5. 映画に誘ってフラれる（依頼の can）

中 1 の教科書では最後に過去形が出てくるが，様々な経験をして夏休みを終えた生徒達には過去形の導入がちょうどよいと思い，扱うことにした。基礎動詞には不規則変化が多いため生徒にとってはタフだったかもしれないが，先述した dictation で毎回少しずつ不規則動詞を含む英文を聞き取らせ，語彙を増やしていった。

2 については，夏休みにしたことについて友達と会話を 30 秒続けることを目標に，相手から情報を聞き出す質問を併せて教えた。過去形を使った疑問文の定着には良かったと思う。今はまだ限られた質問しかできないが，少しずつ質問できる幅を増やしていき，中 3 ではスピーチから質疑応答までしっかりと行えるようにしたい。

3 では，ちょうど体育祭の時期と進行形のタイミングが重なったため，写真を用いて “What are these boys doing?” – “They are –ing.” のやりとりをした。最終的には写真 6 枚を説明できるように再度練習し，授業の冒頭で毎回数人ずつ発表してもらった。

次に過去進行形を早めに導入した。be 動詞の過去形がすでに導入してあったため，文法としては簡単に理解してもらえたと思う。それを定着させるために Mr Bean の動画を視聴し，見終わった後に “What was Mr Bean doing when ~?” の形でストーリーを復習した。Mr Bean が面白すぎて英語に気が回らなかったかもしれない。これは次回以降の課題である。しかし，言葉ではなくジェスチャーや動きで笑いを取る Mr Bean の動画は，動作の説明をさせるのには良い教材であるため，今後も使活用したいと考えている。

このほかにも教科書の Lesson 7 “Sports for Everyone” と Lesson 8 “School Life in the USA” を扱った。教科書も文量がそこそこ多くなり，題材も生徒たちにとって新鮮なものが出てきたため，読み物として扱いやすい。Lesson 7 では wheelchair basketball に関して補足情報を提示し（ダブルドリブルのルールが無いことなど），最後には実際の試合動画を 10 分程度見せた。今までに見たことがなかったようで真剣に見ていた。

2.1.4.2 パフォーマンステスト

2 学期のパフォーマンステストは “My Great Memory [Memories]” とした。過去形を使わせるという狙いと，写真を用いて進行形を使わせるという狙いがあった。80-100 語程度の英語で原稿を書いてもらい，50 秒程度でスピーチしてもらった。1 学期は添削する時間が取れなかったため，今回は 1 週間前に添削タイムを取り，ALT と筆者で添削をした。ただ，全ての誤りを直すと全員分添削する時間がなくなるため，明らかな文法ミスと，意味不明な箇所だけ直すことにした。以下に原稿例を挙げる。

Hello! Please look at this picture. In this picture, I

am playing soccer. Three years ago, I went to Chiba with my teammates. We took part in a soccer tournament there. The tournament lasted for three days. My uniform number was ten. I scored many goals in the tournament, but I sprained my ankle on the second day. Because of that, I couldn't play soccer. I regretted it so much. Finally, my team won the tournament. I sprained, but I was very happy because my team won. Thank you for listening. (91 語) R.K.

彼も塾に通っていないため，授業での成果が見やすい。まず写真を説明する部分では進行形をしっかりと使い，その後の話では一貫して過去形が使えているところが良い。内容に関してもサッカーの試合を中心として自分の言いたいこと，聴衆の知りたいことを網羅しており，申し分ない。take part in や sprain などは授業ではやっていないため自力で辞書を引いたのだと思われるが，そのレベルまで来ているのは授業者としては頼もしい。原稿も完璧に暗唱しており，聴衆を見ながら自信を持ってゆっくりと話していた。とても良いスピーチだった。

今回も前回同様，生徒たちに評価してもらったが，若干観点を変更した。今回の評価観点は①姿勢・目線・声の大きさ，②流暢さ，③内容の理解度，の 3 点である。内容の理解度，というのは聞き手がどのくらいそのスピーチを理解できたか，という観点である。英語が不得意な生徒でもしっかりと練習して発表すれば高得点がもらえるし，逆に英語が得意な生徒が小さな声で早口で話しても高得点にはならない。パブリックスピーカーとしての態度を育成するためにこの観点を用意した。これらの合計点を集計し，各クラスの great speakers を選出し，期末考査後の特別時間割で録画した動画を見せる予定だ。

いずれにしても中 1 の 2 学期の時点で 100 語近くの英文が書け，1 分近くのスピーチができているのは喜ばしいことである。3 学期では文量をこのままにして，スピーチの構成を教えようと思う。

2.1.5 その他、授業外

2.1.5.1 期末テスト

期末テストはライティング能力を高める絶好の機会であるため，生徒たちに事前に詳細なテスト範囲を配布し，しっかりと英文を書いてくるよう指示した。B4 の裏表の解答用紙で，基本的に英文を書かせる問題だけにした。記号や単語で答える問題は全体の 1 割程度である。これにはかなり苦戦しているようであるが，筆者はもちろんこの波及効果を期待しているのであり，「たくさん書かされるから試験前にたくさん書いて練習しておかないと」という意識付けができれば良いと考えている。

試験採点の結果，成績の芳しくない生徒には別途補習をしている。

2.1.5.2 副教材

文法学習用の自習用教材としては『5-Stage 英文法完成 BOOK1』(Chart Institute)を使用している。文法問題だけではなく，CD 付きで dictation 問題も付いているためこの問題集を採用した。

2.1.6 今後の課題

2 年生に向けて，さらに多量な input を与えながらも，その中の一部分を徹底的に暗唱させるなど，intake の時間も大事にしたい。週 3 時間の中で input → intake → output のバランスを意識した授業計画を心掛けていきたい。

<参考文献>

Murphy, R. (2015) *Essential Grammar in Use (4th ed.)*. Cambridge: Cambridge University

Molinsky, J.S. & Bliss, B. (2001) *SIDE by SIDE (3rd ed.)*. NY: Pearson Education

Heyer, S. (1998) *Very Easy True Stories*. NY: Pearson Education.

伊藤健三編 (1976) 『入門時の指導』. 東京: 研究社

根岸雅史 (2017) 『テストが導く英語教育改革「無責任なテストへの処方箋」』. 東京: 三省堂

2.1.7 LL 教室での授業 担当：多尾奈央子

中学 1 年生の授業科目「英語」の週 4 時間のうち、1 時間を視聴覚機器が常設されているＬＬ教室で行っている。教科書は ESL 入門期用の Listen First（Oxford University Press）を使用し、聞いて理解すること、聞いたことを文字として正しく書ける（再現する）ことを中心とした授業を行っている。

小学校での外国語活動から英語の音声には慣れているものの、聞こえた語から発話内容をかいつまんで理解する癖がついており、正確にはどのような語が、どのようなルールで使用されているかの理解は低い。また、綴りがどうしても、聞こえた音をままローマ字表

記にしてしまうことが多い。聞いた英語を正確に理解し、自分で書き起こすことができることを目標としている。

使用教科書は、簡潔な英語での指示文と聞き取りの中心となる語彙が英語で表記されるほかはイラストのみが示されている。音声は英語の自然な速度や口語表現が入門期学習者用に過度にコントロールされずに用いられていることから、聞いて学習したことを使って自分でも発話･応答できるように指導しようと努めた。授業の流れは以下の通り。

① 前時の復習（異なるイラストや設問、口頭で）
② 新出語、表現の導入
③ 発話練習
④ 聴解問題やディクテーション
⑤ ペアで学習した表現や会話の実践（課題提示）
上記⑤のペア学習を２学期より試みる。ＬＬ教室のシステムを利用してランダムにペアを組み、顔が見えない状況の中、音声だけで意思疎通を図ることから、明瞭に発話すること、相手に傾聴することの大切さを理解させた。コミュニケーションを維持するためには、間違いを恐れず、伝えるべき内容を既習の言葉を駆使してまずは発話することが大事であることを体感できたようだ。

2.2　中学２年生（70 期）　担当：須田智之

2.2.1　はじめに

筆者は本校の現高校３年生（66 期生）の中学英語の授業担当者であったので、現在、中学校３年間の指導の 2 サイクル目を実践中である。中学 2 年生では、「Communication Skill としての英語運用力を高めていく」、「英語を使って感動･意見を共有していく」、「英語の発想（日本語との違い）により慣れていく」という３つの目標を前回に指導した際には掲げたが、今年度は新たに「英語の語彙・文法知識を増強していく」、「発音強化」の２つを加え、合計５つの目標を年度当初に掲げて授業を展開している。英語への興味関心が高い生徒や塾などで自主的な学習に取り組む生徒が多数いる一方で、学校の授業以外に英語に触れる機会がほとんどない生徒や英語に苦手意識を持ち始めている生徒も一定数おり、生徒の習熟度の多様性への配慮が大きな課題となってきている。このような現状の中で、本校の英語授業での最終目標は「コミュニケーションの手段としての英語を身につけさせること」･「知識に留まらない英語運用力を養うこと」であると考え、実際の授業を組み立てている。

2.2.2　授業での取り組み

英語の週配当時間４時間は３つの要素から構成されている。「教科書を中心に英語の基本的な仕組みを学ぶ時間」2 時間、「LL 教室で聴解能力の訓練をする時間」1 時間、「ALT とともに実際に英語を使ってみる時間」1 時間という組み立てである。以下に各授業の概要を述べる。

(1)教科書中心の授業（週 2 時間）

New Crown English Series 2（三省堂）を使用し、英語による意味伝達を大切にした授業を心掛けている。教科書の題材の使用に強弱をつけ、発展的な内容や教科書以外の教材の活用も必要だと判断し、1 学期には学習者向けの英字新聞 ST(The Japan Times)からの記事、2 学期末には NHK ラジオ講座『基礎英語 3』の巻末の読み物 The Dancing Men などを使用した。また､昨年度から継続して音声面強化と Warming-up、更には文法事項の導入を兼ねて英語の歌を紹介している。1 学期には映画「君の名は」の主題歌の英語バージョンである *Zen Zen Zense*、映画化されたミュージカル Beauty and the Beast の主題歌 *Beauty and the Beast*、今年惜しまれつつも解散してしまったアイドルグループ SMAP 最大のヒット曲の「世界に一つだけの花」の英語カバー版の *The Only Flower in the World*、Queen の *I was born to love you*、2 学期には Journey の *Don't Stop Believin'*、*Open Arms*、再び Queen の *We will rock you*、*Bicycle Race*、U2 の *Where the streets have no name* などを取り上げた。

(2)LL 教室での授業（週 1 時間）

LL 用コースブック *Basic Tactics for Listening*（Oxford 大学出版）をコースブックとして使用し、リスニング力の強化に努めている。今年度は東京学芸大学の大学院生でもある講師の坂井先生に授業を受け持って頂いているが、年齢的に生徒たちとの距離も近く和気あいあいとした雰囲気の中にも丁寧な指導をして頂いており、特に 2 学期末のテストで点数を伸ばした生徒が多かった。

(3)ティーム・ティーチングの授業（週 1 時間）

ALT と共に行う授業で、教科書ではカバーできない日常的な語彙などを多く取り上げて語彙力の増強を図りつつ、既習の文法事項を定着させるための言語活動

（パターンプラクティス）とコミュニケーションの手段として英語を用いる発表活動（プレゼンテーションなど）をバランスよく取り入れて、英語力育成に取り組んでいる。ALT のサディア先生は本校での指導にも慣れており、時には厳しく生徒指導にも当たって下さり非常に頼もしい。後述する学期末のパフォーマンス・テストの事前指導と原稿チェックなどでも丁寧にご指導頂いた。

2.2.3　授業での取り組みを超えて

(1)English Journal

前サイクルの 66 期生と同様に、生徒に時折テーマを与えながらある程度まとまった分量の英文を書く指導を開始している。これまでのトピックは自己紹介、GW の思い出、夏休み日記、冬休み日記などであるが、以前ほど自宅学習の活動として定着していないと思われる為、今後の指導方法を改善していきたい。

(2)パフォーマンス・テスト

学期ごとのパフォーマンス・テストとして、スピーチなどの発表活動を行わせている。1 学期には本校の総合学習で行う東京地域研究（興味・関心のあるテーマについて企業や公官庁などの訪問調査とプレゼンテーション発表や報告書の作成を行う）について、Tokyo City Field Studies と題して英語で簡単なグループ・プレゼンテーションを実施させた。また、2 日間にわたる東京地域研究の発表会の最後にも 4 つの班が英語でのプレゼンを披露し、今年度の本校 English Room 講師（東京大学大学院の外国人留学生）の 2 人にコメントとアドバイスを頂いた。2 学期末には夏休みの課題図書に選んだ *Billy Elliot* (Scholastic Readers, Level 1)に関してのグループ・プレゼンテーションを①好きな登場人物、②印象に残ったシーン、③作品のテーマなどの分析を踏まえて実施させた。

(3)ミュージカル映画など Authentic な教材

長期休暇の課題として、夏休みには *Billy Elliot* (Scholastic Readers, Level 1)、冬休みには *Apollo 13* (Pearson English Readers, Level 2) を課題とした。どちらの作品も映画を学期末の特別時間割期間に DVD 上映を実施して見せており、英語の本と映画の相乗効果によって生徒たちに題材と英語に対して興味関心を持ってもらうことを教材使用の目的とした。特に、ミュージカル作品（ミュージカル映画を含む）は英語の教材として優れた可能性を秘めているのではないかと考え、今後の更なる教材化を進めたい。生徒たちにはその第一歩として、ミュージカル作品に関するレポート作成を自由課題として時折課している。

今年度、これまでに扱った 2 つの作品について述べる。まず *Billy Elliot* では、主人公の Billy が生徒たちとほぼ同年代の少年であり、バレエという芸術に馴染みの深い生徒は非常に少ないものの、物語の中での様々な出来事や主人公の苦難と葛藤など共感できる点が多いのではないかと考えた。ミュージカルの日本語版が 7 月から上演されていたことも教材選択の大きな決め手となった。劇中にオーディションの場面で主人公 Billy が歌い上げるミュージカル・ナンバー *Electricity* という歌も、普段の英語の歌の扱いとは異なりあまり歌う回数は多くなかったものの、しっかりと生徒たちの心に響いたのではないかと思う。

また、*Apollo 13* では月へ向かうロケットの打ち上げとロケットの故障を乗り越えての地球への帰還という、宇宙空間を舞台にした人間のドラマが描かれている。男子校である本校の生徒には理系、特に宇宙への憧れの強い生徒も沢山いると思うので、共感しやすいストーリーであると思う。

(4)副教材など

英語力を定着させるためには週 4 時間の英語の授業（＝総計 200 分）だけでは足りないのは明らかである。生徒には NHK ラジオ講座『基礎英語 2』または『基礎英語 3』）などの聴取を奨めている他、文法学習用の自習用教材としては『新中学問題集』（教育開発出版）と『マーフィーのケンブリッジ英文法（初級編）新訂版』(Cambridge University Press)を併用している。

(5)多読

中 1 時に実験的に導入していた多読に関しては、今年度は Scholastic 社の BookFlix というオンライン多読に取り組ませている。しかし、残念ながら現在までは普段の授業準備に追われてしまい、なかなか多読に関する継続的な指導ができなかったというのが現状である。この点に関しては、今年度は BookFlix 導入の初年度なので、3 学期には実践のまとめを行いたい。

2.2.4　今後の課題

「国際社会で発信する能力の育成」をめざし、授業と生徒の自主的な学習の相互作用をいかに深めていくか、冒頭に述べた生徒の多様性に配慮しつつ英語への興味・関心をいかにして引き出していくか、中学 3 年

生に向けて生徒全員がいかに英語学習の土台を固めていくかなどが、今後の課題である。

2.3　中学３年生（69 期）　担当：多尾奈央子

2.3.1　はじめに（発展期の１年目）

担当学年は一昨年度より３年目の担当である。小学校での外国語活動の経験から、英語での種々の活動や発表活動に対する抵抗感は全体として低い。一方、日本語でも人前で話すことを好まない生徒にとっては言語が変わっても同じどころか、さらに言葉は出にくくなる。

その場の状況や口調、ジェスチャーなど言葉以外の情報から、活動内容、発話内容をある程度感覚的に理解（推察）できることから、指示を聞き流したり、聞こえた単語からかいつまんで自分なりに解釈したり、と良くない「癖」はいまだなくなっていないことも実感している。「とりあえず概要が理解」できれば、「ポイントを何となく相手に伝える」ことができれば事足りる、という学習ではなく、発展期として既習事項を様々な場面で正しく運用できるよう、発話の場面をより現実味のあるものにすること、生徒一人一人の発話頻度を高める環境づくりに努めている。

１年間の授業を始めるにあたり、中３での到達目標として、以下の５点を示した。

●「話すこと/Speaking」について
①学習した型や語を使って必要なことを伝え合うことができる。
②テーマに従い、聞き手を意識したプレゼン準備ができる（英文作成＆提示資料の準備）。
③準備したプレゼン内容を聞き手に理解してもらえる発表ができる（声量・抑揚・間）

●「書くこと/Writing」について
①学習した型や語句を使って正しく書くことができる。
②伝えるべき内容に合う型や語句を正しく選択することができる。
③読んだり聞いたりした内容を要約することができる。

●「聞くこと/Listening」について
①必要な情報を聞いて要点を正しく理解することができる。
②各種発言やスピーチ、ニュースを聞いて大まかな内容を理解することができる。

●「読むこと/Reading」について
①文章の長短に関わらず、要点や概要をつかむことができる。
②言外の内容を推察することができる。

●「辞書」について　　＊紙の辞書
①意味を調べる以外にも様々に活用することができる。
②発音記号を見て未知語・新出語でも発音できる。
③文章に合う語の意味や語法を正しく見つけることができる。

2.3.2　授業の構成

英語の授業は週４時間あり、そのうち２時間を教科書中心の授業（＝英語の基本的な構造から「型」や論理、および最終的には内容を産出するに必要な語彙を学ぶ時間）、１時間をＬＬでの授業（＝聴解力を養う時間）、１時間をＴＴ授業（＝他の３時間で学んだことを実際に運用しながら、英語でコミュニケーションする力を育成する時間）と位置付け、指導を行っている。

いずれの授業でも、生徒にとって身近な場面や文の型で繰り返したくさんの発話練習をすることでコミュニケーションに必要不可欠な「語彙」と「型（語順）」を身につけられるように教材作成に留意している。

毎回の授業では、「何を学ぶか」「何ができるようになるべきか」を冒頭で明らかにし、生徒自身でもその評価ができる機会を設けている。

2.3.3　教材

・２時間の授業
三省堂 *New Crown English series Ⅲ*
数研出版『5-STAGE 英文法完成 BOOK 3』
自主教材（プリント）
・ＬＬ授業
Oxford University Press：*Developing Tactics For Listening*
・ＴＴ授業
正進社『Talk and Talk 3』
Pearson Education (Longman)：Side by Side
自主教材（プリント）

その他、ＮＨＫ語学番組の『基礎英語３』聴取の継続を推奨している。

長期休業中は課題として文法書以外に reader 書籍を与えるが、この夏の課題にはの “A Close Shave” (Oxford, DOMINOES series)を課した。課題に対する評価は、内容に関する小テストと授業での要約活動で行った。

2.3.4　JTE 単独授業とＴＴ授業

教科としての共通認識である「文法等の先取り学習

はしない」を踏まえ、学習指導要領に沿った文法項目を扱った教材を毎回プリントにまとめ、授業資料兼ノートとして使用している。教科書に掲載の文法事項や英文は基礎基本なので、それらを確実に習得することを踏まえながらも、必ず発展的なものを教科書以外のテクストや新聞なども含めて様々な英文に触れられるように努めている。

教科書ベースの授業では以下が授業構成の基本型。

1) small talk でウォーミングアップ
2) その日に取り上げる文法事項を使った活動
3) 教科書本文（一部改作）の確認
4) その日の学習事項を基に「話す」「書く」活動

ＴＴ授業では、学習する文章の型が使用される（型を使用すべき）状況に遭遇した場合に、既習事項を運用して発話・応答できるよう反復練習し、応用して自分自身のことについて述べるスキット作りと発表活動を行っている。人前で発表することに慣れ、聴衆に伝わるような発表能力を積み上げるために、毎回より多くの生徒が発表できる方法と場を工夫し、評価の対象としている。具体的には、生徒全員の個人カードを作り、毎回カードをシャッフルしてランダムに発表する形をとった。列で順番を決めると、自分の順番が来るまで準備にいそしみ、他の生徒が発表するのを集中して聴くことがやはりできないもので、聴取者の聞く態度も評価項目の一つとしていることから、このランダム方式は功を奏している。

各発表では、教師による評価に加えて、生徒が互いに encourage させる場面を作ることで、プレゼンの成否は話し手だけでなく、聞き手の姿勢も大事であることを理解させるべく努めている。発表の際の指導ポイントは、Speak slowly, loudly, and clearly. および Eye Contact である。その他、intonation, pose, posture, gesture の効果的な使い方、またはその逆も実践の中で指導している。

2.3.5　評価

評価材料の主なものは以下の通りである。

①期末考査
②小テスト
③課題（復習のための問題集と自作プリント）
④ＴＴでの発表活動

評価ポイントが多岐に渡り、生徒が各自自分のできている点ともっと力を入れたほうがよい点について把握しづらいことから、前述の通り、授業冒頭で評価ポイントを明らかにしている。また、これまで同様、すべての学習活動で机間指導を小まめに行い、都度個別に評価する方法の工夫に継続している。時間的にも授業時間を多く割かずに個別の学習内容について確認および評価、助言などの段取りを案出し実行することは難しいものだが、個人カードを作成して随時活用することが記録となり、生徒の学習状況を把握して学習行動を改善・発展させるには、よい方法で実践できたと思う。取り扱う内容によっては毎回の授業で同じことができるわけではないが、一定の型を生徒と教師が共有して継続したことで、生徒自身もいつ、何を評価されるのか、また生徒自身でも評価することを事前に察することができるようになり、毎回の授業や課題への取り組みがより主体的になったと思う。

2.3.6　LL 授業（1 時間）

主として「聞く力」をつけるべく学習するＬＬ授業は、各生徒が利用できるヘッドフォンがつき、USB 挿入口のついた生徒操作パネルで整備されたＬＬ教室で行われる。この授業の利点として、教師側のＰＣから授業で使用した音声を生徒個人のヘッドセットから流すことができること、スクリプトや解答、さらには関連する情報（web ページや映像）まで、生徒モニターに瞬時に提示できることが挙げられる。

この授業では、授業冒頭で洋楽の聞き取り（歌詞の数か所の空所を埋めさせる）をして英語授業の雰囲気、「聞く」活動中心であることから聞くことに集中する環境を作り、続いてテキスト(Developing Tactics for Listening) の１レッスン分を進め、映画鑑賞（英語字幕つき）などを適宜行っている。

2.4　高校１年生（67 期）　コミュニケーション英語Ⅰ

担当：秋元佐恵

2.4.1　はじめに

６年間のシラバスの中で「実践期」２年目にあたる高校１年では、続く発展期に高度な英語表現ができるよう、基礎体力をつける必要がある。よって年度当初、３つのことを目標とした。

① Knowledge → Usage 「知識」から「使用」へ
中学で身につけた文法の総復習をしながら、時制、仮定法、関係詞などを、自然な形で身につけさせる。

②「文型」から「文体」へ
高１からは、教科書の読みやすい文型重視の文だ

けでなく、詩やエッセイ、小説など、いろいろな時代の個人の文体に触れてほしい。心に残る名文を、時に暗誦しながら読んでほしいと思う。

③「楽しい」瞬間の共有

ここ数年、全体授業の意味を考えている。クラス全員が集まっている場でしかし得ない体験があるはずだ。英語が得意な生徒も苦手な生徒も、その教室にいて「楽しい」「わかる」という瞬間が、毎時間1回でもあればと願う。

以下、それぞれの目標に特化した取り組みを紹介する。

2.4.2　授業での取り組み

2.4.2.1　使える英語へ：日英暗誦シート（目標①）

ある題材を、文法項目や文型定着のために選ぶことがある。その際必ず行っているのが、「日英暗誦シート」である。これは、生徒が前回までに読んだ文章から、身につけてほしい文を 10～15 個ピックアップして、B5 用紙に日英対照を載せたものである。ただし作る際に少々加工する。たとえば、ターゲット文法を用いて書き換える、単語を類義語に変える、より言い易いリズムにする、などである。チャンクの切れ目も見やすいように視覚的な工夫をする。なお語彙に関しては、active vocabulary と passive vocabulary をかなり明確に意識して作っている。

たとえば、2 学期に映画 *Stand By Me* を扱った時には、原作の *The Body* で仮定法が多用されている章を一緒に読み、次の時間に印象深い文をピックアップしてこのタスクを行った。

(1) 彼らはまるで僕が存在しないかのようにふるまった。

(2) 僕が君のお父さんだったらいいのにと思う。

(3) それは神様が君に何か授けてくださったようなものなんだ。

(1) They acted as if I didn't exist.

(2) I wish I was your dad.

(3) It's as if God gave you something, man.

生徒はこれを個人やペアでゲーム感覚で覚えていく。なお、このタスクは、前回の内容の復習であるとともに、アウトプットへの橋渡しとしての位置づけである。実際、ここで身につけた仮定法を、自由英作文で上手に使う生徒も多い。

2.4.2.2　様々な題材選び（目標②）

各学期、主に以下の題材を扱った。自分で探したものとともに、先輩や同僚から、「これをやったら生徒の反応が良かった」というものを聞いて、採り入れた。

【1 学期】

・春の詩：Pippa's Song

・言語の歴史（*English and Many Cultures* より）

・Beowulf（*BEOWULF* より）

・Methane Hydrate (Unicorn I より)

【2 学期】

・Mimi-nashi-Hoichi （*Kwaidan* より）

・*Stand By Me* & *The Body*

・El Sistema (Unicorn I より)

・Why Are We Sleepy? (Unicorn I より)

・The House That Jack Built (Mother Goose より)

・冬の詩：The Night Before Christmas

2.4.2.3　「楽しい」瞬間の共有：単語で BINGO（目標③）

英語が得意な生徒も苦手な生徒もわりと楽しんで参加できる活動を紹介する。新出単語を定着させるための、自家製ビンゴである。中学の時にやり始めたが、高校でも皆よくやるので、続けている。各単元の最後、15 分程度で行う。

1. ４×４の升目をプリントにする。
2. 教師がその単元の新出単語を 20 個発音していく。同時に板書する。
3. 生徒はそのうち好きなものを 16 個、升目に入れていく。
4. 準備ができたら、教師がその単語を使った例文を読み上げ、生徒は自分のビンゴにあれば塗っていく。
5. ２列揃ったら BINGO!となる。シールや賞品を出す。
6. 最後に、板書した単語を正しい発音で皆で読み上げ、意味も確認する。

【3 学期】

・BBC drama *Goal!*, ギリシア神話、村上春樹またはカズオ・イシグロの小説を扱う予定。

今後も、できるかぎり魅力的な題材で、できるかぎり楽しく、文法・語彙習得を生徒に促すよう努力したい。

＜参考文献＞

McConnell, Joan. 1996. *English and Many Cultures*. 東京：成美堂.

Hearn, Lafcadio. 1957. *Kwaidan*. 東京：成美堂.

Spence, Victoria ed. 2002. *Beowulf*. Genoa: Black

Cat Publishing.
King, Stephen. 1999. *The Body*. Essex: Pearson Education Ltd.

2.5　高校１年生（68 期）英語表現Ⅰ

担当：山田忠弘

2.5.1　はじめに

英語表現Ⅰ（２単位）は、LL 授業と TT 授業（各週１）から成り、前者が Listening、後者が Speaking の内容となっている。中学校の時と同じく、LL は LL 教室、TT は ALT との Team Teaching で行われる。

2.5.2　LL 授業

授業時間の半分で Developing / *Expanding Tactics for Listening*（Oxford University Press）の１セクションを進め、残りの半分は自作プリントを用いた別のリスニング問題（CNN ニュースリスニング（朝日出版社）、English Journal（アルク）など）、洋楽の歌詞穴埋め（聞き取り）などを行っている。音声データやスクリプトは随時配布して復習できるようにしている。

評点（50 点）は、テキストの４課ごとのまとめ問題を小テストとして使い（10 点分）、期末試験（初見問題含む）を 40 点分に換算した。

2.5.3　TT 授業

１学期は、「自分の意見を英語で言う」ことを目標に、*Solutions*（CENGAGE Learning）のトピック（Bicycle Licensing など）について、３～４人のグループで意見を発表させ、ALT と共にコメントをした。

期末の Speech Test として、テキストの音読、自分の意見とその理由を述べる、ALT の質問に答える、の３つを１人ずつ行い、授業内での Speech（校外学習の思い出）と合わせて、評価を行った。

２学期は、Speech（夏休みの思い出）の後は、Parliamentary Debate を行った。Parliamentary Debate とは、与えられた論題（motion）に対し、肯定側（Government）と否定側（Opposition）が３対３で行う即興型ディベートの方式である。(詳しくは論集第 56 集、須田智之教諭の個人研究を参照)

班分けなどはこちらで毎回変えて指定し、教員（山田と ALT）は欠席などで足りないところなどにメンバーやジャッジとして一緒に参加した。

それぞれの役割や、タイムスケジュールなどは全て決まっており、ワークシートも用意されている。準備時間（15 分）に話し合い、自分たちの説得力あるポイントを挙げ、なおかつ相手のポイントを聞き取り、反論する力が求められる。また話そうとする英語を予め全て書いておくことは不可能であり、良い意味での「英語の適当さ」「頭の回転の速さ」も求められる。英語の流暢さも役立たないわけではないが、議論の説得力がそれに勝ることで、普通の生徒が帰国生徒とも互角に渡り合う場面もしばしば見られた。

評価は最後の２回を Test Round とし、勝敗によって若干の点差をつけたが、あまり大きくならないよう配慮した。３学期も引き続きこの Debate を行う予定だが、評価の問題については改良の余地を残している。

＜テキスト＞

Developing Tactics for Listening（Oxford University Press）

Expanding Tactics for Listening（Oxford University Press）

教材

CNN ニュースリスニング（朝日出版社）年２回発行

English Journal（アルク）月刊

Solutions（2009）（CENGAGE Learning）

2.6　高校２年生（67 期）　コミュニケーション英語Ⅱ

本校のコミュニケーション英語Ⅱは４単位であるが、3 単位を教科書類を中心とした学習に当て、1 単位をティーム・ティーチングとして他の教員が担当している。

2.6.1　（3 単位分）　担当：高橋深美

本校で使用している教科書は　UNICORN English Communication　2（文英堂）である。この教科書は 12 課からなり、それぞれの課が、4～5 つのセクション、文法解説、Exercises、Supplementary Reading から成り、他に For Reading が数ページある。授業では教科書のレッスンをいくつか選んで扱うほか、別のリーディング教材の読解、作文、スピーチ等を取り入れている。文法は必要に応じて説明するにとどめており、語彙、文法の補強としてはワークブックを活用するなど、各自で取り組むこととしている。

2.6.1.1　授業での取り組み

筆者は昨年度もコミュニケーション英語Ⅱの同等

分野を担当しており、教材はそのときに使用したものに、新たに改変を加えて使用しているものが多い。筆者が担当している３単位分の授業は２単位分を教科書等に充て、１単位分をリスニングに充てている。

2.6.1.2　１学期

春休みに Oxford Dominoes 3 の Dian and the Gorillas の通読を課題とし、主として読んできたかどうかを問う試験を実施した。この作品は環境保護が今日のように市民権を得る以前の時代に、アフリカのマウンテンゴリラの保護に一生を捧げた Dian Fossy の物語であり、Dian の保護活動は詳しく述べられているが、それだけでなく、密猟者の子供を誘拐したり、密猟者の村に乗り込んで家財に火を放つところも記述されており、敢えて苦労話と美談に終わらせていない。

生徒の感想の中には、「ここまでしないと守れないものがあることを学んだ」というものがあった。

教科書については１学期は次の２課を選択して学習した。

L.1　Through the Eyes of Imagination

L.4　International Space Station

L.1 は錯視を取り上げていたので、様々な錯視の例を示し、例えば、これとこれは実は合同である、ということを電子黒板を使って、画像の一部を切り取って並べて見せるなどの工夫をしてみた。

このほか、ニュースを数時間使用した。上記の L.4 は、４年前に日本人初の船長になった若田光一さんの宇宙ステーション滞在時と帰還時のニュース（英語）を録画したものが手元にあったので、文字興しをして教材化した。動画は生徒の内容理解と関心の深化に役立つ。

1 学期後半は A.A. Milne の Winnie-the-Pooh の第８章を教材として使用した。Winnie-the-Pooh は原文は必ずしも難解ではないが、格調の保たれた英文であり、随所に言葉遊びが散りばめられている。教科書からほのぼのとしたものが消えている現在、内容的にも適した教材であった。

なお、Follow up として、2011 年の作品である、映画「くまのプーさん」を使用した。ハンドアウトを作成して、内容理解の手助けをしつつ、英語版で全編を視聴したが、授業後の生徒の感想は「プーさんの奥の深さがよくわかった」等、好評であった。

2.6.1.3　２学期

夏休みには Oxford Bookworm ５の Wuthering Heights の通読を課題にした。原文は長編であるが、Bookworm でも 23,000 語あまりになる。このくらいのものを読み終えたことで自信につながった生徒が多かったようである。これについては夏休み明けにテストを行った。

このほか教科書は２学期前半に次の２課を学習した。

L.8　Global Water Issues

L.2　The Problem We All Live With

L.8 は教育実習生が担当した。世界の「水資源」を巡る問題を論じたパッセージである。

易しい課ではないので内容理解に主眼を置いたが、実習生は教材をよく研究し授業に取り組んだ。発展教材として Ludwick Marichane のスピーチ（動画）を扱った。これは実習生が探したものだが、Ludwick は水の豊かでない地域で入浴の代わりに使える DryBath という薬剤を考案した青年である。

L.2 はニューオーリンズで初めて Integrated School となった小学校に通う Ruby Bridges の話であり、この登校風景は Norman Rockwell の絵で大変有名である。授業では教科書とともに、The Story of Ruby Bridges（絵本）の一部を教材として使用した。

2 学期後半は、The Diary of Anne Frank の一部を抜粋して学習した。アンネの日記はよく知られた作品であるが、約 20 年前にそれ以前の版では省略されていた個所を補填した完全版が出版されており、その英語版および通読ＣＤを使用した。アンネの日記は有名作であるが、完全版の全編を読んだことのある人は意外と少ないのではないだろうか。授業では反戦だけを意識せず、一人の 10 代の少女の思いが語られている箇所も使用した。

2.6.1.4　ライティングについて

教科書を使用する授業では、どうしても「話す」「書く」作業が少なめになる。書く作業については数時間を取って、パラグラフライティングの基礎を指導した。内容は「説明文」「情景描写」「意見表明」であるが、無駄な語句を省いて、中身を充実させることを主眼にした。ライティングに関しては、記述能力のスキルアップが課題であることはいうまでもないが、生徒の作品を peer evaluation に発展させた場合、生徒が「自分よりうまく書けている作文を読みたがらない」傾向があり、そこを克服させることがもう一つの課題である。

2.6.1.5　リスニングについて

授業ではアメリカを旅行している男女が、ある犯罪事件に巻き込まれ、ストーリーが展開していく教材を使用している。やや古い教材で、公衆電話や FAX の時代のものであるが、会話そのものは臨場感があり、レストラン、観光、医院、ホテル等の会話も網羅されているほか、ストーリーも次が聞きたくなるところで終わるように工夫されており、生徒も興味を持って学習しているようである。

2.6.1.6　今後の課題

4 技能の伸長が英語科の科目の目指すところであるが、この科目の 1 単位分（ティームティーチング）を担当している教員と連携を取りながら、バランスのとれた技能の伸長を心がけていきたいと考えている。

2.6.2（1 単位分 TT 授業）　担当：須田智之

2.6.2.1　はじめに

高校 2 年生(67 期生)のコミュニケーション英語Ⅱ(4 単位)中の 1 単位の時間を使って、ALT とのティーム・ティーチング(以下 TT)の授業を実施している。主にリスニング・スピーキング力の向上を図ることを念頭に置いて、例年スピーチ、プレゼンテーション、ディスカッションやディベート等の活動が授業内容として実施されることになっている。

筆者は、2015 年度以降、3 年連続でこの TT のクラスで即興型英語ディベートを活動の中心に据えて授業を展開してきた。それ以前に高 2 の TT を担当した際は英語ディベートの指導に関して全く経験がなかった為、準備型英語ディベートの全国大会を参観しに行ったり、帰国子女や社会人向けの英語クラスでの即興型ディベート等に参加したりするなど、様々な試行錯誤を重ねていたことを記憶している。

転機となったのは、2015 年の夏に、本校の秋元教諭に紹介して頂いた一般社団法人パーラメンタリーディベート人財育成協会(以下 PDA)の講習会に参加したことであった。その後、自らも英語ディベートの経験を重ねながら継続的に授業実践を続け、更には部活動での指導と他校への英語ディベートの普及活動にも取り組んでいる。

しかしながら、まだまだ自分は英語ディベート初心者という自己認識を持っているため、指導に際しては試行錯誤を繰り返しながら取り組んでいる感が否めない。その一方で、生徒の日頃の授業への取り組の様子から、特にアウトプットに際しての英語ディベートの効果・有効性を実感している。日本の英語教育の変革には英語ディベートの普及とレベル向上が必須であるという信念のもと、今後も授業実践と普及活動に取り組んでいきたい。

2.6.2.2　1 学期の授業

1 学期の授業では、例年、即興型英語ディベートに慣れ親しむことを目標としているが、筆者は高校 2 年生（67 期生）の授業を担当するのは今年度が初めてであったので、まずは 4 月の授業開きから 2 回の授業を使って英語での自己紹介スピーチを実施してもらった。その後、英語ディベートについての概要・ルール説明とモデルディベートの音読練習、簡単な論題での実践開始といった具合に徐々に英語ディベート実践を進めていった。

本校の授業で採用しているのは、大阪府立大学の中川智晧助教(PDA 代表) 考案の 50 分授業で 1 ラウンド完結可能なフォーマットである。英語ディベートを行う際の役割やルール、試合の流れなどについては、中川先生の著書である『授業でできる即興型英語ディベート』を参考にされたい。1 学期には生徒同士の対戦(ラウンド)を 4 回程実施したが、手順は以下の通りである。

まず、生徒は座席ごとのブロックで 6 人 1 班とし、その中で肯定側 3 人、否定側 3 人の 2 チームを作る。次に、論題(モーション)発表を行い、約 15 分～20 分の準備時間を取ってそれぞれのチームで役割に応じたスピーチを考えさせる。最後は別室の会場にて対戦を実施させ、ジャッジによる勝敗の判定と振り返りを実施する、というのが毎回の実践の大まかな流れである。1 学期には下記の 4 つの論題を実施した。

- A robot dog is better than a real dog.
- Homework should be banned.
- We should make it mandatory for elderly citizens to return their driver's license.
- We should introduce compulsory voting.

本校は前出の PDA の学校会員になっており、毎月の論題が単語シートともに送られてくるので重宝している。授業では更に練習会や大会で論題のネタを仕入れつつ、生徒の興味関心を引きそうな論題を選択している。また、対戦に際しては、1 班 6 名に審判(ジャッジ)と司会(チェアーパーソン)を担当させ、司会進行や勝敗の判定などの経験からも英語ディベートに対する

理解を深められるように工夫をしている。

英語ディベートからは離れるが、1 学期の評価は学期最後に行うパフォーマンス・テストを中心とした形で例年実施している。内容としては、高 2 は 5 月に実施される関西地域研究（校外学習）で各自のテーマに合わせてフィールドワークを実施する為、訪問先で出会った誰か（例えば寺の住職やホテルの支配人等）になり切って、関西の魅力をアピールするという英語スピーチを実施させている。スピーチ原稿のモデルとして、京都市のウェブサイト中の市長の英文挨拶を、デリバリーに際しては Georgia Tech の入学式のスピーチを参考にさせて頂いている。

2.6.2.3　2 学期の授業

2 学期も引き続き、即興型英語ディベートを中心に授業を展開した。使用した論題は以下の通りである。

- The assassination of dictators should be justified.
- We should abolish beauty contest.
- Idols (pop stars) should be prohibited from having romantic relationships.
- Homework should be banned.
- Students should be allowed to work on their own materials during class.
- Having a boyfriend or girlfriend is a waste of time for high school students.

また、2 学期は文化祭直前ともなると、生徒達も疲労困憊の色が濃くなる時期がある。そういった時期に合わせて、デンゼル・ワシントン主演のディベートを題材にした映画 *The Great Debaters* を見せることにしている。物語は実話に基づいており、黒人大学ワイリー・カレッジのディベート・チームの活躍を描いている。人種差別描写など非常にショッキングな場面もあるが、最後のハーバード大学との対戦場面は感動的であり、チャップリン主演の The Great Dictators の最後の演説シーンに勝るとも劣らない主人公 James Farmer Jr.による素晴らしいスピーチを聞くことができる。まさに、ことばの力を実感できる映画であり、英語の教材として優れた映画であると思う。

2 学期の評価は、主に最後の 2 回で実施したディベート対戦をパフォーマンス・テストとして評価の対象とした。評価の対象となって初めて POI という相手チームへの質問が積極的に飛び交うようになった。また各自のスピーチを原稿として提出させることで、ライティングとしてのアウトプットにも繋げることができた。

66 期生に対する授業でも実施したのだが、2 学期末にアンケートを実施し、英語ディベートに対する生徒達の意識を調査した。その結果、多くの生徒達が特にプレゼンテーション能力の伸長と英語ディベートの将来的な有用性を実感していることなどが分かった。

2.6.2.4　3 学期の授業

3 学期は入試などもあり授業の回数が極端に少ない為、授業計画にも工夫が必要である。例年、英語ディベートの他、英語俳句等の Creative Writing に取り組ませるとともに *Dead Poets Society in Tsukukoma* と題して、自作や自分の好きな詩や文学作品等についてのプレゼンテーションを学期末に実施すると共に、原稿を冊子にまとめる予定である。

＜参考資料＞

Dian and the Gorillas　Norma Shapiro
Oxford Dominoes 3
Gorillas in the Mist　Dian Fossey
Weidenfeld　and Nicolson
Gorillas in the Mist (DVD)　Warner Home Video
Wuthering Heights　Emily Bronte
Oxford Bookworm 5
同　Penguin Classics
Winnie-the-Pooh　A. A. Milne　Puffin Books
The Diary of a Young Girl　The Definitive Edition
Puffin Books
同　Audiobook　Unabridged
Anne Frank　(DVD)
ブエナビスタホームエンターテイメント
The Diary of Anne Frank (DVD)
20C Fox Home Entertainment

2.7　高校 3 年生（66 期）　コミュニケーション英語Ⅲ

担当：八宮孝夫

2.7.1　はじめに

昨年度、65 期高 3 のコミュニケーション英語Ⅲ（以下、Com 英語Ⅲ）を担当し、今年度は再び 66 期高 3 の Com 英語Ⅲを担当することになった。65 期は担任学年ということもあり、中 1 の時から 6 年のカリキュラムで授業を行ってきた（詳しくは、「「私家版」中高

6 年間の英語科カリキュラム（改訂版）」を参照）。高 1 では The Declaration of Independence、高 2 ではリンカンの The Gettysburg Address を扱い、その 2 つを踏まえて、高 3 ではキング牧師の "I Have a Dream" speech で 3 年間のまとめとする、という流れであった。ところが、66 期は、今回が初めてで特に高 1、高 2 であるステップを踏んできたわけではない。しかし、やはり高 3 の最後はキング牧師の演説でまとめとしたいという気持ちは変わらなかった。そのためには、この演説の中で言及される上記 2 つの歴史的文書、演説を 1 学期中に扱わなくてはならない。

Com 英語Ⅲは選択科目であり、基本的なフォーマットは、昨年と同様、様々なテーマの英文に対応できるよう、ほぼ毎回読み切りで、文化や社会問題、科学的な読み物から文学的なものまで、なるべくバリエーションを持たせ、英文によって非常にシリアスな硬い調子のものから、軽い皮肉交じりのものまで、いろいろと扱うことにした。しかし Com 英語Ⅲの「目標」や「内容」は「Com 英語Ⅱの学習を踏まえ、情報や考えなどを的確に理解したり、適切に伝える能力をさらに伸ばし、実際の社会生活において活用できる英語の能力を身に付けられるよう設定」されたもの、とあり、歴史的文書や演説を行うのも全く問題はないので、受講者にこの実践の意義を説明したうえで扱うことにした。

2.7.2　1 学期の実践

はじめのうちは 500 語前後の英文を扱うようにした。比較的短い入試問題、小説の冒頭部分、英字新聞のコラム、英文雑誌の記事などを使用。入試問題を使用する場合でも、設問をそのまま使うことはなるべく避け、読み取りの力がつく設問を加えたり、記号選択問題を別の問題に改変したりした。週 3 時間の授業を、概ね以下の 3 つに分けるようにした。

2.7.2.1　400 語から 900 語程度の英文を精読する

指示代名詞や名詞構文で示された内容、文章全体の構造など考えて文意をとる。過去の入試問題、*Science* や *Nature* の Editorial や *The Economist*, *The New York Times Magazine* の記事など。

2.7.2.2　1000 語以上の分量の多い英文の概要をつかむ

かつて東大の教養課程のテクストであった *The Universe of English*, *The Universe of English II*, *The Expanding Universe of English II* などの英文や短編など、注釈を頼りに概要をつかみ内容を味わう（1 学期は The Nightly Battle: Bacteria vs. Egg という科学的教材を読ませた）。

2.7.2.3　リスニングとリーディングを関連付ける

今年度から始まった NHK ラジオ『高校生からはじめる「現代英語」』は有益な教材で、高 3 生にはやや平易だが、リスニングのウォームアップに使用した。また、リスニングとリーディングを関連付けて、それぞれが一種の背景知識となって、その後の発展活動につながるように工夫した。

例えば、上記の The Nightly Battle: Bacteria vs. Egg を読ませた後、"What is Bacteria?" というリスニングを行ったり、その次には The Nightly Battle と同じ著者による "Bed Companions" という文章を読ませたりした。関連付けることで、多少長い文章でも挑戦しやすくなるのではないかと思う。

Com 英語Ⅱまでは、Oral Introduction をし、ある程度新語の導入をしたり、概要をつかませてから英文を読ませたのだが、今回は independent reader として、自らが初見の英文を理解させる力をつけなければならない。そのための心得として以下のことを強調した：（詳細は『駒場論集 56 集』の高 3（65 期）を参照）

1) 冒頭の部分が大切、慎重に読むこと。
2) 冒頭をすべてわかろうとせず、じきにわかるはずだと思って読み進める勇気も大切である。
3) 英文は単独で存在しない。重要なことは表現を変えて繰り返し述べられることが多い。

以上のことは、英文理解のためにはだれでもいうことであり、目新しいものではないが、筆者は特に談話的なつながりに関心があるので、時々適した英文があると、全体の構造を示して、どことどこが言い換えになっているかなど、具体的に示すようにしている。なお、基本的に予習は課さず、その場で配布した英文を 20～30 分で読ませ、残りの時間で理解を確認する、という形式である。2.3 に属するものは 50 分間フルに読ませ、次の時間に理解度を確認した場合もある。

「はじめに」にも書いたように、The Declaration of Independence、The Gettysburg Address という 2 つの教材を 1 学期に扱ったことが昨年との大きな違いである。これらの文章を扱う場合、やはり歴史的な背景知識の導入が欠かせない。65 期の高 1、高 2 で使用した資料をすべて使用する時間的余裕はなかったが、以下のような形で行った：

1）The Declaration of Independence

You-tube の A Reading of the Declaration of Independence (Morgan Freeman をはじめ 8 人のオスカー賞受賞俳優を含む俳優陣による朗読)を視聴させ、注釈を付した本文を配布し読解を行った。また、Morgan Freeman によるイントロダクションも非常に有用で、「この独立宣言はただ読まれるだけでなく、発布された際に全植民地中に騎手によって運ばれ公共の場所で音読されようにリズムも表現もそれを意図したものになっている」という指摘は、この本文を音読教材として扱う十分な根拠となっている。また、起草者のジェファーソンについても mini Bio: Thomas Jefferson という you-tube のビデオを使用し、まず穴埋めのリスニング、その後文字で確認し読解を行った。（この、Biography.com による mini. Bio は偉人を扱う際便利なサイトである）

なお、この「独立宣言」にはジョン・ロックの「社会契約論」の思想が相当に反映されているが、高 3 生は政経や倫理で社会思想史を学んでおり、ヒュームの「社会契約論」などに言及した生徒もおり、やはり高 1 で扱うよりも高 3 のほうが理解は格段に良いと感じた。

2) The Gettysburg Address

こちらは、昨年まで放送していた NHK『攻略！英語リスニング』の 2016 年 6 月号が「南北戦争」「エイブラハム・リンカーン」を扱っているので、それをリスニングとして提供した。また、LL にて以下のサイトの動画も活用した。

・What caused the Civil War? (Virginia Historical Society)
・Lincoln – Life and Death (watchMojo.com)

これらにより、リンカンと南北戦争の背景知識は与えることができる。演説については『アメリカ精神の英語』（筑摩書房）中の Gettysburg Address の注釈などを参考にしてプリントを作成した。演説中のレトリックなどについては *Lincoln at Gettysburg* (Touchstone) が詳しい。実際の演説のモデルとしては以下の動画を活用：

・A. Lincoln Gettysburg speech (Jeff Daniels)
・A. Lincoln Gettysburg Address from the movie "Saving Lincoln"
・A. Lincoln – The Gettysburg Address (mini. Bio)

2.7.3　2 学期の実践

2 学期も基本的には、1 学期と同様、日ごとに内容の異なるパッセージを扱い、読解を中心に行った。ただし分量としては 1 学期よりも長めな物を心掛けた。中には 3 回ほどに分けて扱った教材もある。例えば、Edwin Reischauer という 1960 年代の駐米大使については、昨年は 1 学期に扱ったのだが、今年度は「独立宣言」などのために時間が足らず、2 学期に行った。また、"Why do we laugh?" という教材は *The Expanding Universe of English II* の初めの課で、これはいわば大学 2 年の初めのレベルといえる。冒頭で、英語のジョーク 2 例を取り上げ、なぜこれらが面白いのか、「笑い」のメカニズムを考察し、最後には「笑い」が本来的に持つ意味・機能に触れている。

もう 1 つ、4 回ほどに分けて扱ったのはキング牧師の "I Have a Dream" speech である。この実践については、『駒場論集 56 集』で述べたので、ここでは「独立宣言」とリンカンの演説に関連についてのみ触れておく。まず、冒頭近くで "Five score years ago, a great American, in whose symbolic shadow we stand today, signed the Emancipation Proclamation." と続ける。この "Five score" はリンカンの "Four score and seven years ago" というゲティスバーグ演説の冒頭を踏まえているのである。1 学期に既習のため、生徒はすぐにリンカンとの関係に思い至り、five score(=20) →100、1963 年の 100 年前→1863 年、奴隷解放宣言発布となり a great American と Emancipation Proclamation の関係も一瞬にして了解するのである。また、「独立宣言」との関連では演説の 4 分後くらいに "all men, yes, black men as well as white men, would be guaranteed the unalienable rights of Life, Liberty and the Pursuit of Happiness" という一節が登場し、I have a dream の畳みかけの始まる後半に "I have a dream that one day this nation will rise up, live out the true meaning of its creed: <u>we hold these truths to be self-evident that all men are created equal</u>" の下線部分にも登場する。こちらも 1 学期に既習であるから、生徒はすぐにピンと来たはずである。

具体的な進め方としては、冒頭の部分、中盤の部分、最後の有名な部分と 3 つに分けて、キーフレーズ的な部分をブランクにして、聞きながら穴埋めをし、その確認をしながら補足説明、音声の特徴などを指摘させた。その際役立つものとして、『キング牧師とアメリカの夢』、*The Autobiography of Martin Luther King Jr.* また、若林俊輔氏による音声解説（『現代英語教育』1995 年 10 月号）がある。最近では『I Have a Dream

生声で聴け！世界を変えたキング牧師のスピーチ』もCD 付きでよい。 また、you-tube にも映像があるので、全体の内容理解ができたらまとめとして見せると、リンカン記念堂やワシントン・モニュメントなど位置関係がわかってよい。昨年の論集で触れていないyou-tube の動画は以下のとおりである：

・Martin Luther King Jr. (mini Bio)

2.7.4　発表活動としての実践例

Com 英語Ⅲは、単にリーディングの授業ではないので、読ませたものをベースにして、その要約を書かせたり、意見・感想を書かせたりする活動を行った。1学期の「独立宣言」「ゲティスバーグ演説」について書かせたものの例を挙げる：

"Some people may think that all of Declaration of Independence was written by Thomas Jefferson but actually it was slightly changed by Benjamin Franklin and John Adams. You may know Jefferson and Franklin well but do you know John Adams? He was the first vice president and the second President of the United States. He had progressive ideas that he opposed to slavery and wanted to protect human rights of women too."

(3-3, K)

"The Gettysburg Address is one of the shortest yet most famous speeches throughout American history. In the opening paragraph, Lincoln reminds listeners of the creation of the United States and that its government was based on the idea of liberty. In the second paragraph, Lincoln noted that the Civil War was testing whether the US could be able to survive [sustain?] its liberty and equality. In the last paragraph, Lincoln claimed that the war must be continued in order to justify the deaths of soldiers."　(3-1, S)

2 学期の Edwin O. Reischauer に関して、60 年代の日米の関係と 2017 年で類似点・相違点を述べよという課題の例は以下のとおりである：

"I find the feelings of Americans about Japan is the same. They take it for granted that Japan is on ally of America and make light of it. For example, they place their bases of army in Okinawa and even try to construct an airport on the ground that Japan has no means of defending itself (which actually was forced by Western countries). They go so far as to demand that Japan give money for keeping these bases.

On the other hand [In contrast?], the attitude of Japanese people toward America has completely changed. Unlike in the 1960s, people in Japan now feel they're largely [mostly] independent of America and regard it as equal to japan in terms of economic and social status. Also, they scarcely become furious about America nor find themselves less important.

Mr. Reischauer was trying to take the initiative of leading Japanese and Americans to look on each other as equal partners, and for me, it at least succeeded in changing Japanese attitudes."

(3-4, I)

ただ文章を読むだけでなく、それについて自分で意見や感想を書くことで、文章自体が血肉化する面があるのではないかと思う。

2.7.5　学期末のパフォーマンス・テストについて

筆者は昨年まで担当した 65 期生には中学 1 年から高校 3 年に至るまで学期末には「パフォーマンス・テスト」と称する英語発表を生徒に課してきた。その学期に扱った題材について、自分で調べたり、うんちくを傾けて 2 分間のスピーチを行うのである。英語科では、口頭発表なども成績の一部として評価することが共通理解としてあるので、今年度初めて担当している 66 期にも、パフォーマンス・テストを課した。

1 学期は「独立宣言」か「ゲティスバーグの演説」のいずれかを、2 学期は "I Have a Dream" speech を印象に残った 1 分程度暗唱して、学期の最後の 2 時間で発表させた。

受験を前にして、暗唱のパフォーマンス・テストにどれだけ真剣に取り組んでくれるか心配な面もあったが、予想よりもはるかに準備をしていた印象である。期末考査の最後に、3 年間の英語の授業について感想を書かせたところ、スピーチの暗唱は最初負担であったが、次第にその価値が分かったという風にとらえた生徒が多かった。代表的なものをあげる。

"I'm going to talk about the performance test. When you said that we had to learn the famous speech by heart, I was so worried whether I could do that. However, when I read it aloud many times, it seemed to me that the English sentences were flowing in my brain. It was really a special feeling,

since I had never had an experience like that. When I stood up on the stage and performed it in front of the classmates, the same thing happened. It became an impressive experience for me, as I became so nervous in sight of many people that I always failed in performing.

I appreciate for your giving the opportunity to have such an experience." (3-4, H)

テストの一環で書かせたので、多分にお世辞はあるにしても、人前で話す訓練は肯定的にとらえている。

2.7.6 おわりに

昨年まで6年間担当してきた生徒と、今年1年初めて担当する生徒と、反応の違いがあるだろうかと不安な面もあったのだが、2 学期を終え、基本的には受験的な英文を読むだけでなく、リスニングや暗唱発表、口頭練習をしたほうが、手ごたえがはるかに大きく、安心した。筆者は2学期の初めの週に、長期休暇後の声出しも兼ねて、"The House that Jack built" という有名なナーサリー・ライムを扱った。65 期では中学 2 年で実践したもので、果たして高3で受け入れられるだろうかと思ったが、イラストを順々に提示しながら行ったところ、結構ノリが良く、結局3回にわたって扱うことになった。

ある生徒の学期末の感想として、次のようなものがあった：

"I think the classes of English are one of the most important things for me as an experience in this school.

There are various English teachers and none of them teach us as another does. I could get so many experiences, knowledge, sometimes I could laugh. What I have gotten is so precious, so when I go on to university, I want to try to study English or another language by using these experiences. Thank you for teaching us." (3-3, T)

前述したように、本校英語科では「聞く・話す」を含めた4技能で評価をするという共通理解がある。それぞれの教師で扱う教材・やり方に違いはあれども、この共通理解がある限り、担当者が変わっても、大きくブレることはない。英語科としての方向性に間違いはないと確信した1年であった。

＜参考文献＞

Bodanis, David (2003) Bed Companions (*The Secret House,* Berkeley 所収)

Carson, Clayborne (1999) *The Autobiography of Martin Luther King Jr.,* Abacus

伊藤サム (2017)『高校生からがはじめる「現代英語」』(月刊のラジオテキスト) NHK 出版

Opie, Peter and Iona (1963) *The Puffin Book of Nursery Rhymes,* Puffin/Penguin

Reischauer, Edwin O. (1986) *My Life between Japan and America,* Weatherhill

柴原智幸 (2016)『攻略！英語リスニング』6 月号 NHK 出版

新川右好・森山淑夫編 (1984)『キング牧師とアメリカの夢』三友社

高橋作太朗 (1994)『アメリカ精神の英語』筑摩書房

東京大学教養学部英語教室編 (1993) *The Universe of English* 東京大学出版会

東京大学教養学部英語教室編 (1998) *The Universe of English II* 東京大学出版会

東京大学教養学部英語教室編 (2000) *The Expanding Universe of English II* 東京大学出版会

筑波大学駒場論集 56 集 (2017)

山久瀬洋二 (翻訳・解説) (2013)『I Have a Dream 生声で聴け！世界を変えたキング牧師のスピーチ』IBC パブリッシング

山本史郎、ブレンダン・ウィルソン (2008)『大人のための英語教科書』 IBC パブリッシング

若林俊輔「スピーチ I Have a Dream の魅力」(『現代英語教育』(研究社)1995 年 10 月号所収)

Wills, Gary (1992) *Lincoln at Gettysburg,* Touchstone

2.8 高校3年生（66 期） 英語表現Ⅱ

英語表現Ⅱ（２単位）は、山田と阪田で各１単位分ずつを担当し、阪田が主に和文英訳・文法を、山田はエッセイライティングを扱った。

2.8.1 エッセイライティング 担当：山田忠弘

エッセイライティングパートでは、30～80 語程度の自由英作文練習を行った。授業では自作プリントを用いて２問程度の演習を行い、その日の課題（例１）として 40 語程度の英文を書いて提出させ、翌週に採点して返却している。またこれとは別に月に１回、70～

80 語の問題（例２）を課して、採点・返却している。

各課題の内容点要素は、後日返却の際に示し、ミスは原則－0.5 点とすることをルールとして最初に示した。

（例１）下の風刺画の元となるニュース（疑惑）について、40 語以内の英語で説明しなさい。（どちらか１つの出来事について書けばよい）

採点（６点満点）は、以下の内容があれば加点し、ミスを減点する方式で行った。

（森友学園）② 安倍首相が関与したという疑惑 ① 首相夫人が名誉校長　② 国有地を安く払い下げ ① 小学校を建設予定

（加計学園）② 安倍首相が関与したという疑惑 ① 経営者が総理の友人　② 新規獣医学科の設置希望 ① 政府の認可が欲しい

（例２）*If you could publish a book on any topic, what would you write about? Give your book a title, and briefly describe what you would write about.*（60～80 語）

採点（20 点満点）上の内容点は以下のようにした。

②本のタイトル　②タイトルの簡単な説明、言い換え

② or ④ 情報文　情報１つ毎に加点（最大１６点）

いずれの課題でも「日本語できちんと骨子を作る」（多くの内容点を取る）「できるだけ平易な語彙・構文」「動詞の形を意識する」（減点を防ぐ）といった当たり前のことを繰り返し指摘し、意識させるようにしている。

参考書

「灘高キムタツの東大英語ライティング＆グラマー」(2006)（アルク）

単位のうち、1 時間を自由英作文（パラグラフライティング）の指導、もう１時間を文法の確認と和文英訳にあてている。採択教科書は主に生徒の自宅学習用にあて、授業はすべて教員作成のハンドアウトを使って進められる。

2.8.2　和文英訳・文法演習　　担当：阪田卓洋

この授業では和文英訳，文法演習を担当した。筆者は昨年度も高３に同じ授業を行ったが，そこでの反省として和文英訳，文法指導に拘泥しすぎたことがあった。今回の授業では文法事項もきちんと復習しつつも，英語を聞く，話すという時間も取れるように努めた。

1 学期には，授業の冒頭にリスニング活動を取り入れた。リスニング内容は英語スピーチであり，以下の人たちのスピーチを扱った。

1. Steve Jobs (commencement address)
2. Barack Obama (inauguration speech)
3. David Cameron (resignation speech)
4. JFK (inauguration speech)

それぞれのスピーチの中から筆者が選んだ 2 分程度の箇所を聞かせ，ディクテーションをさせた。スピーチ全体の中で一番盛り上がる箇所に絞って英語を流したため，生徒から「この英語カッコいい」という声もあった。そういう思いでスピーチを聞いてもらえば音読する気にもなるし，その後家で残りの部分を聞いてくれるかもしれない。お試し版のように聞いてもらったが，一つでも自分の中に残るフレーズや響きがあれば筆者としては幸いだ。ディクテーションで扱った箇所はその後音読して，シャドウイングまで行った。

2 学期には毎回授業冒頭に “The Last Message” という題で 3 人ずつスピーチしてもらった。1 学期がリスニングだったので 2 学期はスピーキング活動を冒頭に置くことにした。お題は実質何でも良く，自分の言いたいことを好きなだけ英語で話せ，とした。多岐に亘るテーマでスピーチをしてくれた。以下にその内容をいくつか紹介する。

- My favorite instant noodles
- When to drop by Starbucks Coffee
- Ikebukuro 52 (Japanese idol group)
- Vegetation Transition
- How great Ohtani Shohei is

全員にやってもらったが，一回もトピックが被ることが無く，聞いている筆者も楽しかった。最初のうちはスピーチごとに質疑応答の時間を取っていたが，授業の時間が短くなってしまうため，後半はスピーチのみとした。これは今後もこの授業を担当するときにはやりたい。

その後は，前回の提出課題を返し，共通している誤りを解説した。毎回，授業の終わりに 3 文程度の和文

英訳を課している。大学入試問題を使うことが多い。

そこから本時の学習として一つの文法項目を紹介する。3 年生ともなると大体の文法は正確に使えているが，やはり過去完了形や仮定法などは不正確な知識のまま英作文に使っている生徒も多い。例文を示しながら，和文英訳の問題を解いてもらい，正確な使い方を伝えた。今回筆者が痛感したのは，接続詞と「つなぎ語」（研究社の辞書で使われる文法用語。sentence connectors の意味）の区別がついていない生徒が多いことだ。つなぎ語を接続詞と同じように使っている生徒が多い。以下に例を示す。

- This book contains some mistakes, <u>even so</u>, it is very useful.
- Food was abundant, <u>on the other hand</u> water was running short.

これは対応する日本語が全く問題なく使えてしまうことからくる誤用だと思われる（尤も，even so に関しては『ジーニアス英和大辞典』は接続詞的に振る舞い得ることを例文で明示しており（It rained, (but) even so I enjoyed the game.），これは外国語学習者に見られる誤りというわけではなく，英語話者がつなぎ語を接続詞的に使い始めていることを意味しているのかもしれない）。

いずれにしても，この誤用を解説するためには，接続詞とは何か,「つなぎ語」とは何か，またセミコロンの使い方を併せて教える必要がある。筆者自身，英語で論文を書くまでセミコロンの有用性を知らなかったこともあり，「つなぎ語」をあまり使用できなかった。その経験を踏まえて，生徒にセミコロンの存在意義を熱く語った。

また，日本の学校文法書には接続詞と「つなぎ語」の違いを明確に説明しているものが見当たらない（そもそも「つなぎ語」に相当する用語が確立されていない。「2 つの文の論理関係を表す副詞」という程度の認識である）。そこで *Advanced Grammar in Use* (Cambridge University Press)を参照した。この文法書は “Connecting ideas in a sentence and between sentences” (Unit 87)という項目があり，接続詞と「つなぎ語」をわかりやすく解説している点で有益である。

さて，授業の終盤には英字新聞（New York Times, Independent, The Guardian など）や Time から記事を抜粋し，和文英訳の問題を作成し，2 題程度解いてもらった。仮定法，無生物主語など生徒たちが苦戦しそうだと思われる箇所を選び，和訳させる。ここで和訳させた一人一人の解答を個別にチェックすることはできないため，模範解答と解説を載せたプリントを配布し各自に答え合わせをさせ，質問を個別に受け付けるようにしている。

授業の最後には，提出課題を配布し授業時間内にさせた。できるだけ授業で学習した内容が生かされるような課題を与えた。毎週 100 人分の英作文を添削・採点することはタフだが，筆者にとって勉強になることが多く，また生徒一人一人の英語力が手に取るようにわかるため，これは欠かすことができない。これは今後もこの授業を担当するときは続けたい。

＜参考文献＞

1. 安藤貞雄（2005）『現代英文法講義』開拓社
2. 江川泰一郎（1991）『英文法解説』金子書房
3. 佐々木髙政（1952）『和文英訳の修業』
4. 長原幸雄（1990）『関係節』大修館書店
5. Hewings, M. (2013) *Advanced Grammar in Use.* Cambridge University Press.
6. Leech、 G.N. (1987) *Meaning and the English Verb.* Longman.
7. Quirk et. al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language.* Longman.

3. 課題研究における取り組み

3.1 概要

本校では生徒の主体的な学びを育む一環として、高校 2 年生において、学校設定科目課題研究、または理科課題研究（各 1 単位）のうち一方を選択して全員が履修することとしている。

3.2 高校２年生（67 期）課題研究　担当：八宮孝夫

今年度の英語科課題研究は『Science Dialogue + Negotiation』とした。Negotiation と加えたのは、次のような内容設定」をしたからである：

日本学術振興会のサイエンス・ダイアログプログラムを利用して外国人研究者の講義を聞くと同時に、それをヒントに自分のプレゼン能力をも高めることが目標である。(中学のテーマ学習の発展編)　また、後半では全米模擬国連に出場した筑波大学の講師を招いて、Negotiation の技術も学ぶ予定。

以下のような日程で進めた：

第 1 回　5/27 (3,4 時限)　オリエンテーション

第 2 回　6/10 (3,4 時限)　Science Dialogue 講師

[Dr. John Martin: 人間医工学]

第 3 回　6/24 (1-4 時限)　1,2 時限ゼミ、
3,4 時限 S.D. 講師 [Dr. Paul Harvey: システム研究]
(7/10(3,4 時限)　Negotiation 入門講座)
第 4 回　9/09 (3,4 時限)　Science Dialogue 講師 [Benjamin OVADIA 博士（Mr.）薬学]
第 5 回 10/15 (3,4 時限)
自分のテーマを決め、発表準備開始
第 6 回 11/12 (2-4 時限)　2 時限ゼミ、
3,4 時限 English Room 講師 presentation coaching
(12/19(2-4 時限)
Presentation final practice (with English Room teachers)
第 7 回　1/14 (3,4 時限)　各自研究のプレゼン 1（ゼミナール・オープン）
第 8 回　1/28 (3,4 時限)　各自研究のプレゼン 2（まとめ）
(3/18(3,4 時限)　Negotiation 発展講座)

現在、第 6 回が終了したところで、この回は、3 人の English Room Teachers に来てもらい、15 人の参加者を 3 つの部屋に分け、それぞれで原稿のチェックをしたり、プレゼンテーションの練習をしたりした。冬休み中に最終原稿、パワーポイントを完成させ、1 月のファイナル・プレゼンテーションに臨ませる予定である。発表タイトルをいくつか挙げておく：

・Leadership, Followership
・Japanese writing system
・Aging Society
・Basketball: B-League
・Music
・Exotic Plants from Japan
・Space Satellites

4.　国際交流に関する取り組み

4.1　概要

本校はスーパーサイエンスハイスクール（SSH）として、海外の高校などとの研究交流実績を上げてきた。また 23 年度より筑波大学はその附属学校に対して、「先導的教育拠点」「教師教育拠点」「国際教育拠点」の 3 拠点構想を実現するよう求めており、この数年で本校生徒が国際的に活躍する機会は確実に増えている。

以下に、2017 年度の国際交流活動（予定を含む）を挙げ、いくつかについて説明する。

＜*は SSH 関係＞

(1) *台湾台中市立高級第一中学訪問
(2) *立命館高校 SSH プログラム・北京研修
(3) *横浜サイエンスフロンティア高校(YSF) SSH プログラム・米国トマスジェファーソン高校訪問
(4) 釜山国際高校・KSA（韓国科学アカデミー）訪問
(5) 日本学術振興会による Science Dialogue 参加
(6) イングリッシュ・ルーム

また、訪問受け入れとしては以下のとおりである：

(7) 台湾台中市立高級第一中学より本校訪問
(8) タイ Ubon Ratchathani University より本校訪問
(9) 釜山国際高校から本校訪問
(10) 筑波大学外国人教員研修留学生、音楽祭・文化祭参観。

こう見ると、海外に出ていくばかりでなく、近年は受け入れも積極的に行っていることがわかる。時系列でいくつかのイベントについて述べる。

4.2　具体的な交流活動

4.2.1　台湾台中市立高級第一中学より本校訪問

台中一中からの訪問は生徒 60 名という規模であったため、「国際交流デー」と設定し、高 1・高 2 で特別時間割を組み、高 3 は自宅学習扱いで、文字通り学校を上げて対応した（隔年で訪れ、今回が 3 回目）。

・午前中：歓迎セレモニー、3・4 時間目授業参加
・午後：バディによる校内案内、OS にて研究発表
・放課後：部活など見学

高 1、高 2 の 8 クラスに割り振り、それぞれボランティアのバディが、授業クラスに案内し、午後は別のバディが校内散策以降の案内をした。自治会生徒を含むバディ生徒の数は 140 名にも上る、大掛かりなもので、海外に派遣される以外の生徒も刺激を受けることとなった。

4.2.2　Ubon Ratchathani University より本校訪問

生徒は女子高生を含む 29 名であった。自治会生徒および台湾派遣予定生徒が対応した。

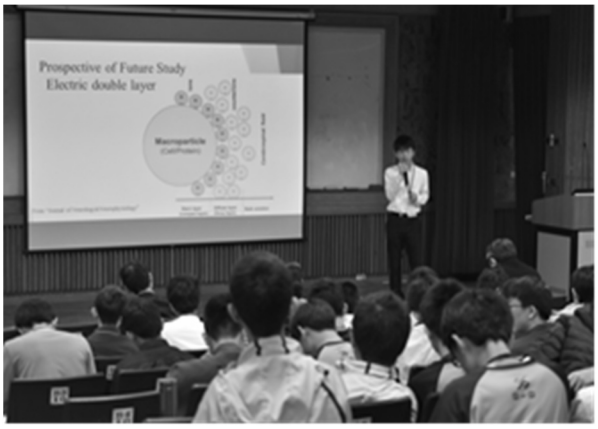
・2 時間目：お互いの学校紹介・小グループに分かれ意見・情報交換
・3 時間目：高 1 の化学・生物授業参観
・4 時間目：質疑応答

午前中だけの訪問であったが、タイ生徒がダンスを披露してくれるなど、文化交流もできた。

タイ生徒と交流する生徒たち

4.2.3　台湾台中市立高級第一中学訪問

今年度は交流が始まって 9 回目。高 1 生徒 7 名、高 2 生徒 9 名、引率教員 3 名、という形で訪問をした。例年通り、事前に後述する Vierheller 夫妻からプレゼン指導を受けた。本校からのプレゼン 8 本、台中一中から 12 本、合計 20 本という豊富さであった。今回は先方のバディ制も復活し、有意義な研究文化交流となった。



英語でプレゼンテーションを行う高２生徒

4.2.4　プレゼンテーション・ワークショップ

昨年度に引き続き、Vierheller 夫妻を招き、プレゼンテーション・スキルを学ぶワークショップを 1 学期期末試験後に開催した。

“Learn to Present”と題された本講座には主に中 3・高 1 の生徒約 20 名が参加し、グループごとの発表活動に取り組んだ。指導の中心は聴衆を引き付けるさまざまなスキル、具体的にはスピーチの声の強弱、イントネーション、アイコンタクト、身振りなどについてであった。2 学年から成る各グループは協力して原稿を作り、発表をしながらその都度指導を受けた。

Mr. Vierheller の指導を受ける

異なる学年での交わりや話し方に関するアドバイスなど、普段の授業では経験できない取り組みであると言える。なお、3 学期には昨年度と同様に、中 1・中 2 対象の「ビギナーズ用ワークショップ」も開催予定である。

4.2.5　イングリッシュ・ルーム

イングリッシュ・ルームは、東京大学の大学院留学生を中心に講師を依頼し、通常は月に 2〜3 回の平日放課後 1 時間半程度で、その日に来た生徒に合わせて英語での会話練習の相手をして頂いている。特に、昨年度末からは語学部のディベート・チームへのトレーニングに多大なる貢献をして頂いており、大会等での上位入賞の原動力となっている。昨年度の実績であるが、2017 年 3 月の日本高校生パーラメンタリーディベート連盟(HPDU)杯では、全国大会準優勝に輝いた。

HPDU 杯の表彰式にて

また、高 2 課題研究の「サイエンス・ダイアログ」では生徒の発表指導や、台中一中や釜山国際高校との交流での発表原稿・プレゼン指導にもご尽力頂いている。

English Room Teachers と会話する生徒